

2019年 春学期

社会科教材論 第6回

ネタを重視する社会科教材論への批判の検討(2)：森分孝治氏の場合

【確認】この授業で大切にしたい視点

1. 教材作りを単なるテクニツク的
な問題と考えないこと
2. 「良い教材って何だろう？」と
いう問いをめぐって、自分の心境・
考えの変化について、向き
合うこと
3. 完成品の教材の完成度よりも、
「教材を作るプロセス」に注
目・意識すること

【確認】この授業の最終的な目標

- **全員の教材のデータが収録された冊子を作ります。**
- **編集作業などもしてもらいます。**



今日の授業の目的共有

- 1. 面白いネタを重視した授業論・教材論
に対する批判を通して、教材に対する
多角的・多面的な視点を獲得すること**
- 2. 批判に対する自分なりの評価を見極め
ること**
- 3. どんな教材論にも、批判が存在すると
いうことを実感すること**

予告(確認)

今日の授業後半には、有田和正氏に詳しい、元中学校教員の方に、ゲストティーチャーとして来ていただきます。

授業やります

何が大切か？

ネタが先か？ 目標が先か？

【確認】有田氏は目標よりもネタ重視

授業を計画するとき、教師は「目標→内容→方法」という順序で考える。…(中略:齊藤)…この思考パターンをくずすことだ。立派な目標を巻上げる前に、どんなネタで勝負するか考えることにしよう。そして、おもしろいネタをみつけよう。ネタがみつかったら、目標をもっともらしく考えればよい。いや、考えなくても、ネタが決まれば目標も決まる。

(有田和正『教室ツーウェイ』創刊号, p.64.)

※資料1を参照

なぜ、森分氏の考え方が有田氏と合わないのか？

【作業1：個人作業20分】

1. 配布資料を読んで、森分氏の考え方を要約文にまとめてください。
2. 有田氏なら、森分の考えにどうツッコむだろうか？
あなたの予想を書いてください。

【作業2：グループワーク：6分】

意見を共有しましょう。

※少しだけ難しい文章ですが、社会科の教材研究をするなら当然読めるべきレベルの内容なので、頑張ってください。

有田or森分、どっちが好み？

【これから作業】

【作業1:5分】

これまでの知識、情報の範囲内で、あなたは有田氏と森分氏のどちらが好みですか？（片上氏は主張も参考に）

【作業2:グループ活動6~10分】

グループで意見を共有・討論します。

例えば、

森分氏

- 目標と授業内容との一貫性
- 目標と落としどころ(まとめ)の一致
- 主題と発問の関連性の一致
- 緻密な分析プロセスの再現

有田氏

- 教材の面白さ・惹きつけられる
- 子どもを引き付けるユーモア
- 意外性

「振り返り・記録シート」の記入

この授業では、「自分の教材観から見える、授業観」を見つめることを重視します。

自分の考えの変化、違和感、モヤモヤ感を出来るだけ、言語化するようにしてください。

(後で、自分の授業観を振り返るための重要な記録になります。)

これまでの感想と比べて、心境に変化はありますか？。

第6回 社会科教材論：ネタを重視する社会科教材論への批判の検討(2)：森分孝治氏の場合

氏名 () 所属学部・学科 ()

1. 森分孝治の授業観・教材観について

【要約文】

森分孝治氏が教材研究・教材作りで大切にしている考えは、

ということである。

【あなたの予想】

有田氏なら、森分の考えにどうツッコむだろうか？

【クラスメイトと意見共有をした際の新たな気づき・視点など】

2. 有田 or 森分、どっちが好み？

これまでの知識、情報の範囲内で、あなたは有田氏と森分氏のどちらが好みですか？

ちなみに、片上氏は以下のようにも述べています。(参考までに)

授業を考えるにあたって、目標を優先させることは、当然のことのようにも思われる。だが、目標を優先させると、授業がそして教師がその目標にしばられ、知らず知らずのうちに子どもの考え方を枠にはめたり、彼らの自由な発想との間にずれを生じさせたりすることになりはしないか、という問題が生じてくる。

・・・(中略：斉藤)・・・

有田氏の授業は、ネタを優先させて考えているために、目標優先型の発想からは思いもつかないような、ユニークで子どもの追究心を湧き立たせるような内容のものが多く。

・・・(中略：斉藤)・・・

今日、依然として支配的な授業づくりと授業の進め方は、目標優先型のそれである。だがそこには思わぬ落とし穴がある。その点に警鐘を乱打したのがネタを優先した授業を考えようという、有田氏の主張であり、氏の実践である。

今日の社会科授業の一般的状況を考えるにつけ、有田氏のネタ優先論とそれに基づくユニークな授業づくりは傾聴に対すると思われる。

片上宗二(1987)「ネタが先か目標が先か」『教育科学 社会科教育』No.293, pp.36-37.

私の好みは、(有田氏の考え方 or 森分氏の考え方) である。

【その理由】

【クラスメイトと意見共有をした際の新たな気づき・視点など】

「第6回 社会科教材論： ネタを重視する社会科教材論への批判の検討(2)：森分孝治氏の場合」の配布資料

資料1

授業を計画するとき、教師は「目標→内容→方法」という順序で考える。・・・(中略：斉藤)・・・この思考パターンをくずすことだ。立派な目標を巻上げる前に、どんなネタで勝負するか考えることにしよう。そして、おもしろいネタをみつけよう。ネタがみつかったら、目標をもっともらしく考えればよい。いや、考えなくても、ネタが決まれば目標も決まる。

たとえば、「一寸法師」をネタにしようとする。すると、「一寸法師で戦国時代の下剋上をつかませる」という目標が、自然に決まってくる。「一寸法師のモデルは誰か」と発問することによって、「信長・秀吉・家康らの戦国時代を引き出す」という目標も出てくる。

これで、ネタとねらいが決まった。

授業の形態は、当然「じっくり考えあう」ということになる。なぜなら、かなり抵抗の有る内容だからである。資料は一寸法師のあらすじの典型場面をあらわした絵4枚が必要だろう。絵本もあった方がよい。一寸法師の歌のレコードも準備しよう。ここまでくると、展開順まで決まる。

まずは一寸法師のレコードを聴かせる。こどもが笑いながらも、いつの間にか歌い出す。歌詞があらすじになっていることに気付く。そこに四枚の絵を提示・・・。面白い授業をするには、「何で勝負するか」ということを第一に考えよう。

(有田和正『教室ツーウェイ』創刊号, p.64.)

資料2

社会科授業内容の選択

1. 主題、理論、事例

社会科の授業構成は、教師が自己の責任において授業内容を選択し組織することから始まる。授業を構成していくことは授業内容を創造していくことをいみしている。探求としての社会科の授業は、社会的事象・出来事について科学的説明ができるようにさせることをねらいとしている。社会的事象・出来事の科学研究の過程として構成されている。このような社会科の授業内容の基本となるものは、主題と理論と事例である。

主題は授業の表題、すなわち単元の授業であれば単元の、小単元の授業であれば小単元の、1時間の授業であればその表題となるものである。しばしば、授業でとりあげられる社会的事象・出来事がそのまま主題とされる。たとえば、「日本農業の課題」「能祖の人口減少」「幕藩体制」「百姓一揆」「都市立地」「産業公害」といった例がこれである。しかし、主題は、授業で取り上げる事象・出来事だけでなく、事象・出来事への1つのあるいは一群の問いをうちに含んでいるものでなければならない。たとえば、「日本農業の課題」でいえば、「なぜ農業人口が減少しているのか」、「なぜ農業の所得は他産業にくらべて低いのか」、「なぜ農民一人あたりの生産性が低いのか」といった一群の問いを含意している。主題とは授業を貫く問い、メイン・クエッションであり、そのメイン・クエッションに答えるための一群のサブ・クエッションを含み持つものであるといえよう。主題は、問いのかたちにかきえられるし、それを授業の主題としてもよい。「幕藩体制は、なぜどうしてつくられたのか」「都市はなぜそこに位置しているのか」、「なぜ産業公害は起こったのか？」という問いを授業の主題としてかかげることもできよう。どのような授業の主題も問いのかたちでとらえなおすことができるが、探求としての授

業の標題は、より科学的な説明を求める問い、すなわち事象・出来事の起因を求める「なぜ」、結果を予測する「どうなるか」という問いそのものか、そうした問いを含みもつものでなければならない。

理論は、授業で子どもに習得させる概念的説明的知識である。それは学級のあらゆる子どもに習得させることをねらいとする「到達目標」となるものである。主題が決定され、授業でとりあげられる事象・出来事およびそれへの問いが決定されると、その問いに科学的に回答し、事象・出来事を科学的に説明していくための科学的な理論が必要である。授業は設定された問いに対する科学的な回答を求めていくなかで、理論を発見し創造し、習得し、その理論を用いて回答していく過程として組織される。たとえば、「日本の農業の問題」の場合、次のような理論が考えられよう。

- 農業で働く人々の所得が他産業で働く人々の所得よりもすくなく、その差が増大してくると、農業人口が所得の高い産業へ移動する。
- 第2次、第3次産業での働き口が増えてくると、農業人口が第二次、第3次産業へ移動する。
- 農業での一人あたりの生産額が他産業のそれよりも少なく、その差が増大してくると、農業所得は他産業に比べて低くなる。
- 農業の生産条件が劣悪であると。農民一人当たりの生産額の向上がさまたげられる。

(これらの一般化・法則は、大内力・金沢夏樹・福武直編『日本の農業』(東京大学出版会、1970年)、福武直編『日本農村の社会問題』(東京大学出版会、1967年)等の文献を参考に設定した。)

これらの農業に関する理論と、それらを更により一般的普遍的にした産業一般に関する理論である。これらの理論は、今日のがが国の農業問題のみを説明するものではない。他国のあるいは他の時代の農業や産業の問題を説明しうるものである。日本農業の課題に対する問いに科学的に回答していくためには、それらの理論が必要であろう。また、「幕藩体制」「百姓一揆」「都市立地」「産業公害」といった主題の含意する一群の問いに統一的な回答を与えるためには、幕藩体制、百姓一揆に関する歴史学の理論、都市立地に関する地理学的理論、市場経済下における企業行動に関する経済学の理論を理解し習得することが要請されてこよう。授業は、とりあげられる社会的事象・出来事について、これらの理論を用いて科学的に説明できるようにさせることをねらいとするとともに、転移力のあるこれらのこれらの科学的理論の習得をねらいとしている。もし、「日本農業の課題」を単元として構成するとすれば、右の農業に関する理論が小単元の「到達目標」として設定されよう。どのような授業においても、何らかの理論が提示されているけれども、探求としての授業で提示される理論は、科学的なそれであり、しかもそれは子どもによって批判可能なように明示されるべきである。

事例は、主題の問いに答え、理論を発見し、吟味し習得していく上の素材となるものである。主題は、より一般的普遍的な事象・出来事をとらえ、「なぜ」を問いかけていくが、その問いへの解答は具体的な事例の分析によってなされる。「日本農業の課題」でいえば、たとえば、「郷土の町の農業」か、「南薩台地の農業」か、あるいは「中国山村のA村」が事例として取り上げられて、それらの分析から、「日本の農業の課題」を考察していくことになる。理論は、具体的な事象・出来事を分析し得る過程で発見され創造され、また、それらにもとづいて吟味されていくとき、子どものみ方考え方として内面化されていく。先に示した「郷土の町の農業」「南薩台地の農業」等々の事例にみられる諸事実について、「なぜ」と問い、探求していく過程で学習されていく。・・・(中略：斉藤)・・・子どもは、具体的な事実の分析・研究から、一般的な事象・出来事の本質をはあくし、科学的な理論を習得していく

わけである。

授業内容の基本となるものは、主題と理論と事例とであるが、社会科授業の構成の多くの場合、「日本農業の課題」、「産業公害」を理解し説明できるようにさせたいというところから出発して、まず主題を決定し、次にそれを科学的に説明するための理論を設定し、最後に事例を選択するという潤になる。しかし、たとえば、「市場経済」に関する理論を教えたい、都市立地に関する理論を教えたいというところから出発し、「産業公害」、「都市立地」という主題を設定するという順序になることもあろう。

(森分孝治(1978)『社会科授業構成の理論と方法』明治図書, pp.144-147.)

資料3

集団でなされる授業の検討は、教材構成や教授・学習課程の組織が、目標達成の上から適切なものであったかどうか、授業があるいはその部分が失敗した場合、教材構成・教授学習過程組織のどこに問題があったのか、成功させるにはどうすればよいか、あるいは設定された目標そのものがこの子どもたちにとって適切なものであったかどうか、この場合どのような目標が適切であるか、さらに、一般に考えられているよりも高い目標が達成できたのはなぜか等を授業の事実に即して吟味していくことになる。設定されている授業目標は、一応達成されていても、授業に重大な問題がある場合、教授者のもつ社会科授業理論が批判の対象となってゆこう。単元や本時の目標はこうした授業の観察・検討を裏あるものとする形式になっていなければならない。

(※下線は斉藤によるもの)

(森分孝治(1985)「より高い目標の批判しやすいかたちでの表示を」『教育科学 社会科教育』No.278, pp.69-70)

資料4 (有田氏の研究授業を批評した際の原稿)

有田氏の本時の「ねらい」にみられる「着目させる」「考えさせる」というのは、・・・中略：斉藤・・・、目標達成の視点として子どもがどうすることであるのかがはっきりしないので、前者は「知る」あるいは「知らせる」、後者は「わかる」「わからせる」とした方がより明確になろう。しかし、有田氏のこの「着目させる」「考えさせる」という表示の仕方には、授業に対する氏のもう一つのねらいが込められている。氏が資料にもとづいて問答方式できっちりと説明していけば、三分の一かあるいはもっと少ない時間で「知らせ」「わからせる」ことのできる内容を時間をとって子どもに話し合わせていたのは、「知らせ」「わからせる」だけではない別のねらいがあるからである。それは、「研究主題」にみられる、「日本の歴史に対して、問いかけの姿勢を持てるようにする」に示されている。氏は、この授業を通して、日本の歴史を学習していく上の望ましい態度・能力を形成することをねらいとされている。しかも、授業の事実から見ると、この態度・能力の形成の方に重点がおかれているように見える。ところが、本時の「ねらい」は、こうした氏の授業の子のねらいを具体的に示すものにはなっていない。授業において知らせわからせる、すなわち、知識・理解よりも重視されている態度・能力が、本時の目標として明確に示されていないわけである。知識・理解と態度・能力の目標を分け、それぞれを明示すれば、教授者の意図もよく分かり、観察・協議における検討がそれだけ容易になるのではないか。

・・・(中略：斉藤)・・・

このように知識・理解と態度・能力にわけて授業の目標を示した方が、氏の授業のねらいが明確にな

り、それぞれの項目について、「展開」は達成できるものになっているかどうか、授業で達成されたかどうか、それぞれが本時の目標として適切かどうかなどを検討しやすくなり、観察・協議はより実りのあるものとなる。

(※下線は斉藤によるもの)

(森分孝治(1985)「より高い目標の批判しやすいかたちでの表示を」『教育科学 社会科教育』No.278, pp.70-71.)

【資料】小単元「なぜ公害が起こるのか？」(森分孝治(1978))

中学校「公民的分野」

1. 主題:「公害はなぜ起こるのか？」

2. 小単元の目的: 資本主義社会における市場経済のメカニズムから公害の本質を解明する。

3. 到達目標(獲得させたい概念的説明的知識)

【特に重要な四つの概念的知識】

- ① 企業が経営合理化(機械化、集積)すると、私的費用は減少し、社会的費用は増大する。
- ② 社会的費用は負担しきれないので、公害が起こる。
- ③ 企業が集積すると公害は増幅される。
- ④ 企業は外部不経済を内部化するが、外部不経済を内部化しないので公害が起こる。

【関連する5つの概念的知識】

- ⑤ 企業は極大利潤を追求する。
- ⑥ 企業は極大利潤を追求するので、集積する。
- ⑦ 企業が極大利潤を追求するので、私的費用は負担するが、社会的費用は負担しない。
- ⑧ 企業は極大利潤を追求するので、外部経済は内部化するが、外部不経済は内部化しない。
- ⑨ 企業は極大利潤を追求するので公害が起こる。

4. 小単元の構成(中学校で3時間)

導入

公害はなぜおこったのだろうか。

展開

- ① なぜプラスチック公害はおこったのか
- ② なぜ四日市では公害がひどくなったのか
- ③ なぜ企業は外部経済を内部化するが、外部不経済を内部化しないのか。それはなぜ可能か。

まとめ

公害をなくすにはどうすればよいか。

4. 授業の流れ

教師の発問	生徒による資料読解や、 予想・分析などで分かること。
<p>T：公害はなぜ起こったのだろうか？ T：なぜ企業は公害を発生させたのか？</p>	<p>思い思いに話し合わせる。</p>
<p>プラスチック公害を取り上げてみよう。なぜプラスチック公害が起こったのだろうか？</p>	<p>S：プラスチックを使い始めたから。</p>
<p>◎なぜ、ヤクルトはビン容器からポリ容器に変えたのだろうか？ T：なぜビン容器をポリ容器に変えることで儲けることができるのだろうか？ T：生産過程では、どうやって儲けを増やそうとしているのだろうか？ T：流通過程ではどうやって儲けを増やそうとしているのだろうか？ T：生産過程や流通過程を変えることによってなぜ儲けることができたのか？ T：ヤクルトはビン容器をポリ容器に変えたことによって、どれくらい儲けたのか？</p>	<p>【生徒の予想⇒資料の確認】 資料は以下の1つ ① 「<u>ポリ容器採用による功と罪</u>」 (東大生協編『ヤクルトは効くか』より) ビン容器をポリ容器に変えると・・・ 生産過程は ・生産工程の自動化 ・大量生産 ・人員の整理削減 ・ビン詰工場の統廃合 流通過程は ・軽量化、われにくさ ・肉体労働の削減 ・婦人販売店の増加(＝販路の拡大) 結果として、大量生産⇒大量消費⇒一本当たりの生産費が廉価になり、もうけが出る。</p>
<p>MQ：ビン容器をポリ容器に変えたことが、一本当たりの費用を本当に安くしたのだろうか？ T：ビン容器の時、空の容器はどうされていたか？ T：ポリ容器は使われた後にどうなるか？ T：ヤクルトはポリ容器を回収していないのか？ T：家庭のごみはどのように処理されているか？ T：このようなゴミ処理にはどのくらいのお金がいるのか？ T：家庭から出たゴミをゼロにするには何がいるか？ T：以上のことからビン容器をポリ容器に変えることによって、一人当たりの容器はどうなったか。</p>	<p>【少し考えさせた後に、資料を読み取る】 資料は以下の3つ ② 「<u>プラスチック公害</u>」 (伊東光晴『現代経済を考える』より) ③ 「<u>ポリ容器回収率</u>」 (東大生協編『ヤクルトは効くか』より) ④ 「<u>ごみ処理原価一覧表</u>」 (東京都清掃局『事業概要』昭和46年度版より)</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 20px; text-align: center;"> <p>図表を引用掲載 ()</p> </div>
<p>MQ：以上のことをモデルで説明しよう。 T：私的費用は生産量が増えるにしたがって、どうなっているか？ T：社会的費用は生産量が増えるにしたがってどうなっているか？ T：社会的に見た平均総費用の曲線は、生産</p>	<p>資料は以下の1つ ⑤ 「<u>社会的に見た平均総費用曲線</u>」モデル (伊東光晴『現代経済を考える』より)</p>

<p>量が増えるにしたがってどうなっているか？</p>	<p style="text-align: center;">図表を引用掲載 (授業時のみ)</p>
<p>MQ:なぜプラスチック公害が起こったのか。このモデルで説明してみてください。 T:ヤクルトがビン容器をポリ容器に変えたことによって、私的費用はどうなったか？ T:ヤクルトがビン容器をポリ容器に変えたことによって社会的費用はどうなったか？</p>	<p>【教師によるモデルの説明】 <u>資料は以下の1つ(再掲)</u> ⑥ <u>「社会的に見た平均総費用曲線」モデル</u> (伊東光晴『現代経済を考える』より)</p> <p style="text-align: center;">図表を引用掲載 (授業時のみ)</p> <p>ビン容器からポリ容器になると</p> <ul style="list-style-type: none"> ・一本当たりの私的費用は減少し、企業の儲けは増える。 ・一本当たりの社会的費用は増加するが、 ⇒企業は社会的費用を負担しない。 ⇒社会が社会的費用を部分的に負担する。 ⇒その結果、<u>プラスチック公害が起こった。</u>
<p>MQ:プラスチック公害をとりあげて、なぜ公害が起こるかについて学習してきたが、公害がそのように起こっているのを他の公害の例で調べてみよう。</p>	
<p>MQ:なぜ四日市公害は起こったのですか？ T:なぜ大気は汚染されたのですか？ T:なぜ硫酸化物の排出量が増えたのですか？ T:戦前と戦後を比べて、四日市にはどんな</p>	<p>【資料などの読み取り】 <u>資料は以下の4つ</u> ⑦ <u>戦前と現在の四日市の工場配置図</u> (庄司光『現代日本の都市問題5』より) ⑧ <u>硫酸化物排出量一覧表</u></p>

<p>企業がどのように増えていますか？</p>	<p>(『凡例事報』より) <u>⑨ 被告 6 社工場の製品・原料等の受け渡し関係</u> <u>(『別冊ジュリスト』No43より)</u> <u>⑩ 工場の過失</u> <u>(宮本憲一『地域開発はこれでよいか』より)</u></p> <p>四日市公害＝大気汚染(四日市ぜんそく) ↑ いおう酸化物排出量の増加 ↑ 石油化学関連企業の集積</p>
<p>MQ：なぜ企業は集積するのだろうか？(企業が集積することで、なぜ企業にとって利益をもたらすのだろうか?) T：企業が一か所に集積すれば、なぜ便利なのだろう。 T：原料や製品等の受け渡しが便利だから企業は一か所に集積するのだろうか。もしそうなら、四日市以外のところでもよいのではないだろうか。なぜ四日市には企業が集積したのだろうか。</p>	<p>【生徒の推測⇒資料の確認】 資料は以下の一つ <u>⑪ 公害防止投資と総投下固定資本額の関係</u> <u>(庄司光『現代日本の都市問題5』より)</u> ・企業間の原料・製品の受け渡し、相互依存 ・工業立地の条件として道路、港湾、鉄道、用地、用水などが便利</p> <p>つまり、<u>外部経済の内部化が起こる</u>。</p>
<p>MQ：企業が集積すれば必ず公害は起こるのだろうか。 T：道路・港湾・鉄道・用水などのように、企業がただで使っているものを外部経済というが、他にどんなものがあるか？ T：企業が水や空気などをただで利用すればどうなるか。 T：企業が水や空気をただで使っているから公害が起こるのだろうか？</p>	<p>【教師が、内部経済・外部経済について図で説明する】 資料は以下の1つ(再掲) <u>⑤ 「社会的に見た平均総費用曲線」モデル</u> <u>(伊東光晴『現代経済を考える』より)</u></p> <div style="border: 1px solid black; background-color: #e0e0e0; padding: 20px; text-align: center;"> <p>図表を引用掲載 (授業時のみ)</p> </div>
<p>MQ：なぜ四日市公害が起こったのか？プラスチック公害の事例も参照しつつ、考えましょう。 T：企業が集積すれば、私的費用はどうなりますか？ T：企業が集積すれば社会的費用はどうなりますか？</p>	<p>【生徒が結論を出す】 企業が集積すると⇒私的費用が減少し、企業が儲かる ⇒社会的費用が増加し、四日市公害が起こる。 しかし、企業は社会的費用を負担しない。</p>

<p>T：企業が集積すれば総費用はどうなりますか？ T：企業が集積したことによって多大な社会的費用がいるようになったのに、企業はなぜ儲けたのか？ T：四日市公害はなぜ起きたのか？</p>	
<p>MQ：なぜ企業は公害を防止しようとしなかったのか？ T：なぜ企業は値段をつけることができない水や空気などをただで使って、その結果がもたらす影響については考えなかったのですか？ T：なぜ企業は公害を起こしてまで、儲けようとするのだろうか？ T：そうして儲けたお金を何に使うのだろうか？(企業が設けたお金はみんなに還元されていくのだろうか？)</p>	<p>【推測⇒資料の確認】 資料は以下の1つ ⑫ <u>ヤクルトホームの広告</u> (「ヤクルトホーム」の新聞折り込み広告より)</p> <p>利潤 ↓ 投資(ヤクルトジョア・ヤクルト化粧品) ↓ 利潤 ↓ 投資(ヤクルトホームの設立)</p> <p>・・・と極大利潤を追求し続ける。</p>
<p>今までのことから、なぜ公害が起こるのか、図などで説明してください。</p>	<p style="text-align: center;">図表を引用掲載 (授業時のみ)</p>
<p>T：現在の経済システムの下で、公害を無くすには、どういう対応が考えられますか？</p>	<p>【生徒に推測させて、資料を読み取る】 資料は以下の二つ ⑬ <u>公害への対策</u> (長洲一二『現代の資本主義』より) ⑭ <u>負担へ国民党後を</u> (『朝日新聞』昭和50年5月21日より)</p> <p>① 外部経済の社会化 ② 汚染者負担の原則 ③ 外部負経済の発生源防除 ④ 公共的監視・是正</p>